

平成 21年 5月 15日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720094
 研究課題名 (和文) 上中古漢語における機能語体系の通時変化のメカニズム—区域拡散の視点から—
 研究課題名 (英文) On the Latitudinal and Longitudinal Developments of Function Words between Classical and Middle Chinese
 研究代表者 松江 崇 (MATSUE TAKASHI)
 北海道大学・大学院文学研究科・准教授
 研究者番号：90344530

研究成果の概要：本研究は、上古漢語（前漢以前）から中古漢語（後漢魏晉南北朝）にかけての時期に生じた文法変化のうち、疑問代名詞を中心とする機能語体系の通時変化のメカニズム、ならびにその変化の区域拡散の過程を解明することを試みたものである。研究成果は以下の三点に集約される。第一点は、疑問代名詞目的語の語順変化について、疑問代名詞の種類に応じて前置から後置という語順変化の速度に差異があることを明らかにしたことである。第二点は、この差異が「統語的曖昧性を軽減しようとする欲求」及び「名詞目的語への類推」という疑問代名詞の種類によって影響の受ける程度の異なる二つの要因によるという仮説を提出したことである。第三点は、疑問代名詞目的語の語順変化、並びに疑問代名詞体系の二音節化が中原地方で生じた後に江南地方に拡散していったという文法変化の区域拡散の一側面を明らかにしたことである。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	210,000	2,510,000

研究分野：中国語学

科研費の分科・細目：言語学・中国語学

キーワード：古代漢語、文法史、代名詞、機能語、漢訳仏典、古代方言

1. 研究開始当初の背景

漢語（中国語）圏は、どの文化圏にもひけをとらない膨大な文献群と、多様な方言群を

包括している。その意味で、古代漢語研究は、一般言語学の歴史言語学理論に対して積極的に貢献し得る好条件を、本来は備えている。

しかしながら、わが国や中国大陸の多くの古代漢語研究は、伝統的な文献学的研究の重みのためか、個別の語法・語彙項目の伝統的な記述研究に限定されてきたうらみがあり、歴史言語学の理論的研究の面では必ずしも期待される成果をあげているとは言い難い状況にある。

一方、米国・香港などでは、言語理論、とりわけ共時文法理論の高度の発達、古籍の電子テキスト化の進展を背景に、理論偏重とも言い得る対蹠的な傾向をみせている。しかしながら、それらの多くは、一般言語学理論の漢語への適用という、いわば消極的な方法に終始しているとの感が否めず、古漢語研究内部から新たな理論が提案されることは決して多くはない。このことは、これらの研究の多くが、純度の高い共時資料の選定や内容の解釈といった地道な作業を、あまりに軽視していることと無関係ではないと思われる。

わが国は、古代漢語語彙の考証、そしてテキスト・クリティークの方面に、独自の重厚な伝統を有する。古漢語研究そのものから帰納される理論は、このような研究を前提としてはじめて可能になる。特に近年、陸統と発見された出土資料、難解とされてきた初期漢訳仏典の研究が、大いに進展したこともあり、上中古間漢語史（先秦～魏晉南北朝）における文法変化・語彙変化のメカニズムを解明するという理論的研究を行い得る諸条件が満たされつつある。特にこの時期に注目するのは、音韻体系の簡略化、複音節語の急増、結果補語の成立などに代表されるように、この時期の変化が漢語の言語類型論的性質をも左右するほど重要なものであると推定されるからである（梅広（2003）など）。

このような上中古間漢語における文法・語彙項目の変化のメカニズムを解明する際、最も有効な作業は、当該の項目が上古・中古の諸方言において、それがどのような地域差を呈しているのかを詳細に記述することである。すなわち、上古・中古諸方言における当該の言語項目に関わる方言的差異を踏まえ、それを比較言語学的方法を援用しつつ解釈することによって、どの方言における状況が古く、どの方言における状況が新しいのかを推定し、上古から中古への変化の流れを描写するということである。そしてそれを踏まえれば、当該の文法変化・語彙変化の区域拡散の実態と通時変化のメカニズムが推定できることになると考える。

但し、以上のような研究により、上古・中古間の文法変化の流れを記述するには、上古中古の諸文献言語と具体的な地域方言との対応関係が推定されている必要がある。筆者は、近年、世界最古の方言語彙集ともいわれる漢代の揚雄『方言』の言語地理学的研究にも取り組んでいる。その研究を踏まえれば、

上述のごとき研究の前提も次第に整いつつあると考える。

2. 研究の目的

上・中古間に生じた主要な機能語体系の通時変化について、それらの上古・中古諸方言における区域拡散の実態とそのメカニズムを解明することが研究の目的である。このことが明らかになれば、上古・中古期に生じた類型論的性格にまで及ぶとも推定される言語変化の根源的な要因が特定し得る可能性がある。

本研究では、とりわけ上古と中古の間にあたる後漢末・魏晉期に注目する。この時期は、漢語史において極めて重要な時期であり、音韻体系の簡略化、代詞・否定詞などの機能語体系の簡略化、複音節語の急増、そして文法化による動詞接尾辞の発生、など漢語の類型論的性質にまで影響するような大きな変化が相次いで生じた時期であるからである。これらの変化が、直接にはどのようなことを原因として、互いにどのように関連しながら変化したのか、これらのごとを解明することは歴史言語学一般に対しても大きな意義を有するであろう。

なお、本研究が機能語体系を研究対象とするのは、これが上中古間の言語変化を観察するという目的に適しているからである。上古漢語の機能語体系は、代名詞、否定詞、句末語気詞などのそれぞれの体系において、音形の類似する複数の単音節の機能語が、相当に複雑な体系をなしているが、これらの機能語が中古以降になると複音節化していくと同時に、その体系は簡略化されていくという現象がみられるからである。このようなことは同時期に生じたと推定される音節構造の簡略化と密接な関係にあると考えられ、この現象が上中古間に生じた言語体系全体の変化の本質を直接的に反映したものである可能性が高い。また、機能語は文献言語における出現頻度が極めて高いため、通時変化を検討するのに必要な言語データを得られやすいことも、これを研究対象としてとりあげる理由の一つである。

3. 研究の方法

具体的には、以下のような予備的作業および研究を行う。

(1) 上古・中古漢語史資料の選定・公表

本研究で使用する文献資料・電子テキストなどを選定し、必要があれば購入する。特に本研究において特徴的な資料である出土資料や早期漢訳仏典の各種版本などについて重点的に収集する。さらに、早期漢訳仏典について、他の類書に引用された箇所との比較、機能詞の体系などによって、言語学的な観点から資料とし得る箇所と然らざる箇所とに

弁別する作業をおこない、結果として選定された言語資料を発表する。

資料収集に際しては、国内外の善本を積極的に参照する。

(2) 上古・中古文献言語の通時的位置づけ

上記(1)で選定した資料に基づいて、その体系的な記述研究(共時研究)を行い、上古・中古の代表的な文献言語について(上古中期『論語』『孟子』『左傳』『国語』『呂氏春秋』、上古後期『史記』、中古初期『六度集經』『仏説義足經』、中古中期『賢愚經』『雜宝藏經』『百喻經』『世説新語』)、それらの主要な文法項目・語彙項目についての異同を記述する。各項目について、各文献言語における状況の新旧が推定できるものについてはそれを行い、その結果を集積することにより上古・中古の代表的な文献言語についての通時的な位置づけを試みる。

無論、以上の作業だけでは、各文献言語間の通時面での相対的關係が明らかにされただけであり、それぞれの基礎方言が具体的にはどの地域の方音であるのかを特定することが可能性になるわけではない。しかしながら、以上のような相対的關係を一つのモデルとして、各文献言語に具体的にはどのような基礎方言を想定すれば、モデル全体が無理なく説明できるか、といった観点により、一定程度信頼性のある推定をすることは可能である。

以上のごとき作業は、それ自体が言語学的価値を有するが、歴史言語学における通時理論を展開する際の基礎資料とすることを意図している。

(3) 揚雄『方言』による方言区画の再検討

筆者は、以前、揚雄『方言』による方言区画を発表したことがあるが(松江(2000))、本研究では、それを語彙拡散の方向性という点から再検討する。例えば、揚雄『方言』において、「江淮」地域と「楚」地域と「南楚」地域の關係について注目すると、「江淮」と「楚」、「江淮」と「南楚」とがそれぞれ同一の語彙が分布することが多く、言語的に近いと推定される。ところが「楚」と「南楚」とは同一の語彙項目について異なる語彙が分布することが多く、言語的に断絶性が強い。この現象は、共時的に見れば一見、矛盾した状況であるが詳細に検討すると、実はある種の通時的变化を反映したものである可能性が浮かび上がる。すなわち、「江淮」と「南楚」の近似性はより古い言語層に由来し、「江淮」と「楚」の近似性はより新しい言語層に由来するという可能性である。仮にこの推定が正しければ、新しい言語層に属する「楚」と「江淮」の近似性は、「楚」から「江淮」への語彙拡散によって形成された可能性が高いことになる。無論、以上は一つの可能性にすぎないけれども、揚雄『方言』の主要な

各地域についてこのような観点からの網羅的な再検討を行うことにより、漢代の主要な各地域における語彙拡散の一般的な方向性について、一定程度の根拠のある推定をすることができる。

(4) 上古漢語における代名詞体系の成立過程とその崩壊過程の解明

平成19年度においては、具体的な問題に取り組む。その第一は、上古漢語においては特徴的な代名詞体系—音形の類似した代名詞がしばしば機能面でも類似しているという体系—の成立過程である。

古くは、Karlgrén(1920)がこの現象に基づき、上古漢語の人称代詞名詞に“格屈折”がみとめられると主張して以来、この上古漢語においては特徴的な代名詞体系は、原始漢語或いは上古漢語に“形態変化”が存在したことの証拠とされてきた。しかし筆者はこの見解に対して、疑問代名詞「孰」「誰」の新体系の区域拡散という観点から、懐疑的な見解を提出したことがある(松江(2004))。この筆者自身の見解に基づきながら、研究の範囲を他の代名詞体系などにまで範囲を拡大し、上古漢語においては特徴的な代名詞体系の成立過程を明らかにする。無論、その際、上記(1)で選定した資料に基づき、また上記(2)で明らかにした各上古文献の通時的な位置づけを踏まえつつ研究を進めることにする。

さらに、上古漢語の代名詞体系の崩壊過程にも取り組む。主に早期漢訳仏典などを資料として、その崩壊がどの地域から生じ、どのようなプロセスを経て完了されたのかを明らかにし、音韻体系の変化などとの関連性についても解明を試みる。

(5) 研究成果の集成：上中古間における機能語体系の区域拡散とその通時变化のメカニズムの解明

上述の研究を踏まえ、それらを類型論の視点から捉えなおし、上古・中古間に生じた通時变化のメカニズムについて、文法、語彙、音韻の相互關係を具体的に検討することにより、上中古間の言語变化の本質を明らかにすることを試みる。

4. 研究成果

上述のごとき方法・計画によって研究を進めた。遺憾ながら、すべての項目に関して十分な成果が得られたわけではないが、計画段階では予想しなかった成果が得られた場合もある。本研究の成果は以下のようにまとめられる。

(1) 中古漢語資料の方言的性質の解明

中古期に成立したとされる『六度集經』言語について、現存の文献言語が三世紀当時のものを大凡保存していることを『経律異相』所引の箇所との対象により確認した。さらに

その言語を同じ中古期に成立した『中本起經』『過去現在因果經』『雜寶藏經』と比較することにより、『六度集經』言語が三世紀の建康方言を反映している可能性を指摘し、言語資料としての重要性を明らかにした(口頭発表「略談《六度集經》的口語性—以疑問代詞系統為例」『漢語史學報』2006年)。

(2) 禪母系疑問代詞体系の成立過程

上古中期漢語における禪母系疑問代詞「孰」「誰」の体系をとりあげ、両者が『論語』『孟子』の特定の文型においては、「孰」は主語、「誰」は目的語としてのみ生起する傾向がみられることを指摘し、このような統語的相補分布は「統語的曖昧性を軽減しようとする欲求」により引き起こされたものであると主張した。さらにこの統語的相補分布の具体的な生成メカニズムについての仮説を展開した(「上古中期禪母系疑問代詞系統中句法分布的互補現象」『漢語史學報』第六輯2006年)。

(3) 揚雄『方言』研究の推進

従来の『方言』にもとづく方言区画論の欠点を指摘し、隣接する地域間の言語的距離を、共通の語彙が分布するか否か、異なる語彙が分布するか否かという二種の指標によって計測する方法による区画論を、中国で刊行された揚雄『方言』研究の研究論文選に発表した(「漢代方言中的同言線束—也談根據方言的方言區劃論」『揚雄方言校釋匯證』2006年)。

(4) 馮勝利氏による韻律文法理論の批判的検討

近年、斯界の注目をあつめている馮勝利氏による韻律文法理論の観点からの歴史文法研究について、氏の理論では上中古漢語の言語事実を十全には説明できないこと、韻律文法の理論面でも重大な問題点が存在すること、などを指摘した(「馮勝利氏の韻律文法理論について—古漢語疑問代詞目的語語順変化についての馮説の検討—」『佐藤進教授還暦記念中国語学論集』2007年)。このことによって、近年、馮氏によって強力に推進されている「上中古間における漢語の文法変化は韻律構造の変化によって引き起こされた」という大胆な仮説の信憑性が大きく失われることになったと言える。

(5) 早期漢訳仏典にみえる特殊な文法現象の漢語口語との関係の解明

上中古間漢語文法史研究の重要資料である早期漢訳仏典にみられる特殊な文法現象をとりあげ、それらが漢語の口語とどのような関係にあるのかを検討した(「也談早期漢譯佛典語言在上中古語法史上的價值」『漢語史學報』第八輯, (掲載予定))。すなわち(A)完結動詞「已」のアスペクト・マーカ儿的用法、(B)人称代詞の複数表示、(C)疑問代詞の後置語順の三項目の文法現象について、

(A)(B)は漢語の口語を一定程度反映したものであるけれども、漢語口語を直接に反映したものとはみなし難く、漢語口語に実在した文法現象がいわば“拡大”された形で反映されたものであると指摘し、さらに(C)は原則として漢語の口語をそのまま反映したものとみなし得ることを指摘した。

(6) 疑問代詞目的語語順変化メカニズムの解明

これは本科研において取り組んできた中心的な研究課題でもある。主要な内容は、(A)疑問代詞目的語「誰」は統語的曖昧性を軽減させるという文法的要求により前置から後置に転じ、そして(B)二音節語化により急増した「何+N」目的語フレーズは、その前置形式が反語専用形式化したことにより疑問表示のために後置形式が出現し、さらに

(C)「何N」型疑問代詞目的語は急増した「何+N」目的語フレーズへの類推により後置へと転じた、といった語順変化の具体的なメカニズムを明らかにしたことである。さらに、以上のような変化が後漢魏晋南北朝期に発生したのは、これらの変化がすべて“単音節疑問代詞体系の簡略化および二音節語化”というこの時期に顕著になった変化と密接に関連しているからだと主張した。この成果を総括したものを「古漢語疑問代詞賓語詞序變化機制研究」として発表した(「浙江大學漢語史研究中心學術研討會」2008年)

(7) 中古漢語における単音節と二音節の“共存”現象の実態の解明

上古から中古に至って機能語・内容語のいずれも二音節化が進展するが、その際、単音節語と二音節語とが共存する現象がみられること、そして両者には往々にして機能上の微細な差異が存在することを指摘した(「淺談中古漢語同義的單雙音節詞“共存”現象」『漢語史詞彙與語義演變學術研討會』2008年)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

①松江崇「也談早期漢譯佛典語言在上中古語法史上的價值」『漢語史學報』第八輯, 2009年 (掲載予定), 査読有,

②松江崇「馮勝利氏の韻律文法理論について—古漢語疑問代詞目的語語順変化についての馮説の検討—」『佐藤進教授還暦記念中国語学論集』(好文出版), 100-124頁, 2007年, 査読無

③松江崇「上古中期禪母系疑問代詞系統中句法分布的互補現象」『漢語史學報』第六輯, 71-89頁, 2006年, 査読有

④松江崇「漢代方言中的同言線束—也談根據方言的方言區劃論」『揚雄方言校釋匯證』1509-1533 頁, 2006 年, 查読無

〔学会発表〕(計 4 件)

①松江崇「淺談中古漢語同義的單雙音節詞“共存”現象」漢語史詞彙與語義演變學術研討會」2008 年 8 月 25 日, 金溪山莊(中国・杭州)

②松江崇「古漢語疑問代詞賓語詞序變化機制研究」浙江大學漢語史研究中心學術研討會, 2008 年 8 月 23 日, 浙江大學漢語史研究中心(中国・杭州)

③松江崇「也談早期漢譯佛典語言在上中古語法史上的價值(稿)」『日中兩國資料による中古漢語研究の新展開』, 2007 年 8 月 31 日, 北海道大学(札幌)

④松江崇「略談《六度集經》的口語性—以疑問代詞系統為例」『漢訳仏典の言語の様相 (Aspects of the language of Buddhist Translations)』, 2006 年 11 月 11-12 日, 創価大学(八王子)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松江 崇 (MATSUE TAKASHI)
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号: 9 0 3 4 4 5 3 0

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし